# 展 景

季刊

## No.68

2012 年 12 月 22 日 発行

通巻第 68 号　オンライン版 第 8 号

無二の会

muninokai.com

季刊　展景　68号

# 目次


水の心　水の袋〈短歌〉……結城　文　3
東長生会〈短歌〉……池田桂一　4
色変へぬ松〈俳句〉……岩田都女　5
濡れると寒くって〈短歌〉……小野澤繁雄　6
冬を待つ〈短歌〉……河村郁子　7
震災ののち〈短歌〉……布宮慈子　8
ホタルの石蕗（つはぶき）〈短歌〉……丸山弘子　9
近江気まぐれ文学抄 37
『平家物語――木曾最期』……新関伸也　10
戦闘機乗り……松井淑子　12
〈那須通信 13〉冬がくる……加藤文子　14
〈鳥海山麓だより 6〉幼なじみ……鈴木京子　16
対詠　ごきげんいかが？ PART 44……丸山／布宮／小野澤　18
前号作品短評A……19
前号作品短評B……20
エッセイ教室「清紫会」の作品より
上諏訪……小野澤繁雄　21
人・人・人の中で……大石久美　22
ハナコさん……丸山弘子　24
「清紫会」だより……26
無二の会短信……27
編集後記……29

# 水の心　水の袋

結城　文

膨れあがる不如意のごとき積乱雲　世界ははげしき雨音を恋ふ

水の心もてあましつつみだれ雲水の袋のわが見上げぬつ

颱風の去りし街上にぬつと出づ異様に赤き大き満月

驟雨のやう月の光は降りてきつ人住まぬ寮の角を曲がれば

地震すぎしのちの橋脚くつきりとその影水に落としてゐたり

遠き日にともに見たりし浮見堂あとからあとからくる波暗し

晴れし日の紺青の水に添ひてゆくただ歩くといふそのことのみに

見つけたきものは何なるはりつめしやうにひそまる冬の湖

かりそめの世なれどさはれ燦として光放てり淡海（あふみ）の湖（うみ）は

沈む日の光をうけて白骨樹今にもぱつと燃え出しさうなり

# 東長生会

池田桂一

毎週のG・G（グラウンドゴルフ）は月曜の半日がかりもことわりきれず

他人よりも早出をなして八本のホールポストセットは副会長（わたし）の仕事

一ゲーム目は調子が出ないとそれぞれに言い訳をして競技は続く

会長にならず副席にとどまりて楽するはずが見事外れり（東長生会）

台所間近の部屋より鳴く親の子猫を呼ぶかやさしき声に

白蝶がもつれ合うごとひとところ蕎麦の花畑風渡りゆく

ゆうゆうと羽をひろげて舞う鳶のするどき声に空見上げたり

棕櫚（しゅろ）の花穂（かすい）少しの風にも落ち続く池面を黄色に染めて仕舞いぬ

現実はわが前にあり　穴の明きし蔵屋根を日毎逸らさずに見る

原稿の締め切り迫れば拷問と思えるほどの寝汗に目覚む

# 色変へぬ松

岩田都女

酔芙蓉(すいふよう)終の一つを切りにけり

読み止(さ)しの本や母校の蔦紅葉

虫すだきをり江戸城の裏鬼門

身に入(し)むや爪先立ちにお七寺

ほしきまま秋の一日を使ひけり

遺(のこ)す衣始末する衣初時雨

あかがねの打ち出し急須鳥渡る

衣被(きぬかつぎ)ほろ酔ひ父の額かな

仙台平の袴を畳むさはやかに

色変へぬ松や白抜き五つ紋

# 濡れると寒くって

小野澤繁雄

一片の雲なき空をなにがなし足りぬおもいのままに歩むも

一つ田のあちらこちらに藁束の残されていて秋天雲なし

巨人兵のごとくに影が先をゆく腕もゆられて土手みちをゆく

箒跡あるような園にいきあたり鉄棒の鉄の棒に触れにき

「柿の種」に似る柿の種一粒が落ちていた本町一丁目バス停に

秋になってようやくに知人の庭の草抜かれいる垣越しに認む

雨の日を歩きでてさてどこまでを橋までと決めて歩き始む

団地自転車置場は片付いて空気入れ置かる子ども自転車脇に

アパートの名にアパートは珍しく鈴木アパート家主鈴木饂飩（うどん）

雨の日の見守り隊のおじさんは長靴「濡れると寒くって」

# 冬を待つ

河村郁子

白露来ていまだに熱中症情報　季(とき)を巨峰の到来に知る

彼岸きて朝な夕なのすずしさに夏の怠惰の始末いかにぞ

あかときの風に精気をもどしたし仏間・居間へと言霊さがす

朝六時雨戸開けたる私を吸い込むような秋の青空

窓越しに亜麻仁の色の光さす景徳鎮の白磁愛でいつ

昼ふかき秋の日差しに山さくら葉をまるめつつ来る季(とき)をまつ

秋の日の森に射しこし斜(しゃ)の光ふいに葉うらの虚蟬(うつせみ)照らす

茎のみを残して群れ立つ曼珠沙華犬の墓訪う道すがら見ゆ

楓の葉の色づくなしに縮みゆく乾いた秋の終りの香り

秋雨の止むなく降(くだ)る夜のふけに冬遠からぬ気配の潜む

## 震災ののち

布宮慈子（やすこ）

長月は兄の一周忌　震災を経験ののち六月でゆきぬ

十月は安達裕之の三回忌　大震災を知らず逝きたり

よんじふねん離（か）れて住まへば本当の好物知らずわが母なれど

祭りきて客をよぶとき四キロの赤飯注文したる母上

姉が欲し姉が欲しとぞ願ひたる十二の心いまだ消えずも

丘の上（へ）に畑の収穫手伝へば三十年後のふくしま思ふ

奪はれし畑の時間おだやかに暮らししふくしま原発事故後

おほかたの猫のグッズは片づけぬ　おまへが遊ぶはずだつたサンルーム

震災ののちを生ききて文月六日われの腕（かひな）に眼を閉ぢぬ

共に見し蔵王かくれてみちのくの土に眠れり江戸つ子の猫

## ホタルの石蕗（つはぶき）

丸山弘子

あぢさゐの返り花にて神無月に「隅田の花火」が二つ咲きをり

平和公園を訪ふも久しき川につづく土手一面はヤマハギの花

川岸に咲くもまつすぐにはたてぬキバナコスモス溢るるばかり

公園の園芸クラブの嫗（おうな）たち花壇を秋の草花に替ふ

わが町のテーラー『シルベリア』再開のポスター「紳士服注文お受けします」

母の背をはるかに越しし少年のどなる声　今朝も登校拒否か

わが分けしホタルの石蕗愛でゐたる版画家金澤氏武蔵嵐山に死す

むづかしきは分らぬ出品作品の版画の線にこだはりしを言ふ

通勤の車中を書斎と言ひてゐき古書『方丈記』を給びし日おもふ

訪ねたるわれを書斎に招き入れ集めし書物をあつく語れり

# 『平家物語――木曾最期』

新関（にいぜき）伸也

平清盛亡き後、彗星のごとく現れた木曾義仲は、都の権力に果敢に挑み、やがて散っていったが、その最期を迎えた地が、近江は粟津松原である。木曾義仲こと、源義仲は一一五四年に生まれ、義賢を父に持ち、また頼朝、義経とは従兄弟の関係にあったが、源氏一族の争いに巻き込まれ父義賢が殺されたのが二歳の時である。父亡き後、木曾の中原兼遠に預けられ、そこで養育されている。やがて成人した義仲は、頼朝挙兵に続き、平家を攻め滅ぼすため、木曾で挙兵し、都を目ざす。義仲は信濃の武士を従え、上野まで勢力を広めつつ、日本海側の北陸道を進軍する。

先ず彼の名を高めたのが、加賀と越中との境にある倶利伽羅峠での戦である。敵方の平維盛の軍勢を奇襲戦法「火牛攻め」で総崩れさせた話は、有名である。平家滅亡の序章となる出来事であった。

この勢いで上洛するが、西日本一帯は干ばつによる飢饉で死者が多数出た「養和の飢饉」とよばれる国難と重なっていた。上洛した五万騎の義仲軍らは、人馬の食糧確保のため略奪行為を重ねる。後白河法皇や公家にとって、無教養で粗暴な振る舞いをする田舎侍やその棟梁で皇室の継承問題で対立する義仲は、鼻持ちならぬ存在であった。ついに、法皇は頼朝に対して東国支配権と引き替えに、義仲討伐を要請するのである。求めに応じた頼朝は、翌年正月、弟の範頼、義経に義仲討伐を命じる。範頼軍は琵琶湖の南から勢田を通って西に進軍し、一方の義経軍は宇治から北上して、都に騎馬を進ませた。挟み撃ちにされた義仲らは、万事休すで為す術がなく、死に場所を求めて敗走していくのである。

『平家物語』では、賊軍となった義仲の最期の場面を「木曾最期」として描いている。乳兄弟で義仲の家臣、今井四郎兼平は勢田で軍勢を死守していたが、北陸方面へは逃げ切れず、京を目ざす道しか残されていなかった。一方、義仲は今井四郎を捜し求め湖岸を北上する。このような敗走の中で両人は、大津の打出浜で出会うのである。このときに今井は義仲に死に場所を「粟津の松原」と進言する。そこに向かう途中で、義仲が騎馬で踏み込んだ薄氷の場所は、底なしの深田であった。人馬は首まで泥につかり、もがけど微動だにしない状態となる。兼平を気にして振り返ったところを敵の石田為久に顔を射られ絶命する。首をはねられ敢えない末期を迎えるのである。旭将軍、享年三十一歳であった。

後の世に、義仲の菩提を弔うために、戦国大名佐々木六角高頼によって膳所に「義仲寺」が建立される。都人に忌避されて悲劇的最期を迎えた義仲に哀感を持つ人も多い。江戸の俳人松尾芭蕉もその一人で、遺言により同所に墓がある。

# 戦闘機乗り

松井淑子

「日本の戦闘機って、ずいぶん小さいんですね」

靖国神社で初めて日本の戦闘機を見たという若い友人が、驚いたように言った。

「そうよ。だからうちの庭先にもかくまっておくことができたのよ」

そう私が言うと、友人は冗談だと思ったらしく、本気にしなかった。

冗談でなく本当に、うちの庭先に戦闘機を一機かくまったことがある。

あれは太平洋戦争末期のことである。私たちは父方の親族を頼って山口県の瀬戸内海側、源平の合戦で名高い壇之浦にほど近い海岸べりの漁村に疎開した。そこは白砂青松、正に絵のように美しい村だったが、驚いたことに、家から徒歩二十分弱のところに軍の飛行場があったのである。

ところが村の人たちはのんきなもので、ここは軍の飛行場といっても重要な場所ではなく、実際に特攻隊機が出撃する九州の大刀洗（たちあらい）飛行場の分廠（ぶんしょう）に過ぎないから、敵に狙（ねら）われるおそれはない、と言っていた。

だがそれはとんだ考え違いで、やがて空爆を受けることになった。幸い飛行場は海に張り出していたため、民家に被害は及ばなかったが。そのせいか間もなく、農家など広い敷地を持つ家には、戦闘機をかくまうように、との命令がどこからか回ってきた。

私たちの家も、農家ではなかったが、蜜柑（みかん）の木が五、六本植わったそこそこに広い前庭があったので、一機入れるよう要請された。

やがてからたちの生け垣や蜜柑の木が伐採され、ついで戦闘機が、大勢の整備兵たちによって引き綱で引っ張られて、人力で運びこまれてきた。戦闘機は機首を家のほうに向けて、無事、前庭に納まった。

ここまではまあよかった。ところが、それからがいけない。整備兵たちが試験的にプロペラを回しはじめたのである。すると、風速何メートルか知らないが、台風並みに強いプロペラの風が家にもろに当たったため、前庭に面した縁側に吊るした簾（すだれ）は吹き飛び、部屋の障子の紙はすべてヒラヒラに破れてしまった。

仰天した母が、戦闘機の向きを変えてくれるよう整備兵に掛け合ったが、いっこうに聞き入れてもらえない。二言目には、「お国のためだ。我慢しろ」である。途方に暮れているところに飛行服の人がやってきた。その人がこの戦闘機の乗り手だそうで、その人に訴えると、大層すまながって、たちまち向きを変えてくれた。

そんなことがあってから、その人は自分の戦闘機を見回りにくるたびに、私たちと話をしたり、弟に操縦席を見せてくれたりするようになった。

年のころはいくつぐらいだったか。私の目にはいいオジサンにしか見えなかったが、母に言わせると、まだ二十代の若い人らしかった。鼻の周りに大きな傷痕（きずあと）があり、それは東京上空で米軍機と空中戦をして、どこかの山中に墜落したとき受けた傷だそうで、

「よく助かったものだと思います」

と言っていた。

疎開してくる前、東京上空での空中戦を私たちも二度ほど見たことがあった。夜間のことで、大きな米軍機に体当たりし、砕けて、花火のようになって落ちてゆくのは、いつも日本の戦闘機だった。あの中の一機がこの人だったかもしれない、と母は涙ぐんだ。

それからしばらくしてその人は、本隊に復帰することになったので、と言って戦闘機ともども去っていった。

靖国神社の戦闘機の話から、久し振りにこの人のことを思い出したが、考えてみると、この人の名前を私は知らない。

〈那須通信13〉

# 冬がくる

加藤文子

九月末、夏の日射しをやわらげてくれた寒冷紗（かんれいしゃ）を取りはずす。暑い日が続いたので例年より半月ほど遅くなった。

食卓からのぞむ前庭を覆っていた寒冷紗がなくなると、空が高くなって視界がひらける。表の通りもよく見えるようになって、人や車の行き来が近くに感じて、少々落ちつかない。

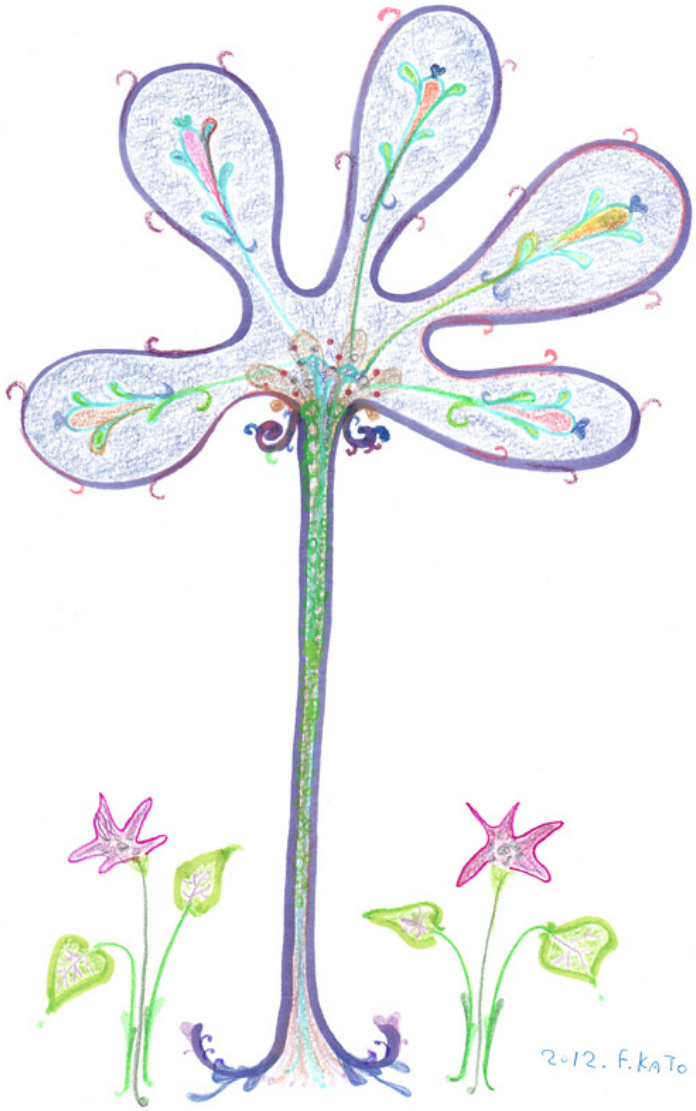
いつの間にか陰影のある風景と親しくなってしまったらしい。

散歩をする人から食卓にいるこちらがはっきり見えるわけではないけれど、何となく恥ずかしいような気もする。

色づきはじめた草木の上方で赤とんぼが飛び交う。静止したり、上昇したり、瞬間瞬間で場を変えていく。変則的でありながらある法則が潜んでいるかのようにも見える。

そろそろ寒さの苦手なカポックやベゴニアを室内に取り込むことを考えなければならない。

玄関通路にあるガラスの棚が、室内植物の置き場になる。夏のあいだ小さなオブジェを



置いている棚。陶のスプーンや花のオブジェを並べたのはこのあいだのことのような気がするのだが、夏はとうに終わっている。間もなく片づける日が訪れる。

室内植物を家の中へ移動させたあとは、空いた所へ他の盆栽を移す。また、シーズンの終わった野草は、枯れた部分を刈り込んで温室の棚下へ仕舞う。そんなことをしながら、少しずつ冬へむかう。

近くの雑木林にでも生えているのだろう、キンモクセイのほのかな甘い香りが届く。ほんの少し暑い秋の日に、こんな優しい香りが漂うと、永遠につながっているような不思議な心地になって、ついボンヤリしてしまう。

牛を飼うお向かいさんは、刈り取った牧草を機械を使って梱包している。カラコロ、機械を回す音が、のどかに響く。白いシートに包まれた牧草は、冬のあいだの餌になる。

そういえばずっと来なかった台風が、明日、あさってにかけて通過するらしい。しかもかなりの勢力をもっているという。

キンモクセイにうっとりばかりしてはいられない事態だ。盆栽たちを避難させて備えなければならないのだが、しばらくぶりで戸惑っている。

温室に仕舞うもの、棚上で寄せておけばよいもの、振り分けるのに時間がかかる。しかも判断に自信がもてず、何度も庭をまわってはやり直す。これで安全だろうか、大丈夫だろうか、心配が尽きない。

夕方がきて大雨が降り出したので、やっと諦めがついた。

台風が通り過ぎたあとの庭が、いけなかったところを教えてくれるだろう。

台風が去って、木枯らしの吹く日がやってきて、那須の山の頂が白くなって……冬がくる。

〈鳥海山麓だより６〉

# 幼なじみ

鈴木京子

茨城県の北部の、田んぼの多い田舎町で生まれ、高校卒業までそこで暮らした。十代の入り口ですでに、「この町を出る日こそが自分の人生の始まりの日」と、思春期にありがちな頑さで思いつめていたから、卒業後は、片手で数えられるほどの友人を残し、あの町での付き合いは自分から消してしまった。

だから、私には「幼なじみ」でくくれる人間関係がピンとこない。

コメ倉庫の季節雇いも終了間近となった十月下旬。コメの納入に来たハジメさんに「倉庫終わったあとは何してる？」と声をかけられ、赤カブの収穫を手伝うことになった。

赤カブの収穫は、ある程度の大きさになったものだけを抜きながら集め、次に葉っぱと根っこを包丁で切り落とす。畑のあちこちにできた山を数人で囲み、ひとつずつ片付けていく。モモちゃんとチエコちゃんとハジメさんと私の四人で四日間作業した。

モモちゃんとチエコちゃんはハジメさんの妹の同級生なんだってサ。つまり、三人とも同じ幼稚園、小学校、中学校に通い、同じ地域でそれぞれ新しい家族をつくり、子どもたちも同じ学校に通わせ、そして六十代の今もチャン付けで呼び合う。赤カブの葉っぱを切り落としながら、五十年前のやんちゃ（いたずら、悪さ）の裏話をあかし合い、大笑いする。すごいなあ！

遊佐町から望む冠雪した十一月の鳥海山

「故郷を捨てたモン（者）にはわがんね世界なんでろ？」

ハイ、わがんねです。

ちょうど去年、高校卒業二十五年の記念同窓会の案内が来たけれど、行きたい気持ち半分、でも結局はこわくて行かなかった。

何がこわかったのかな。同窓会の様子を撮影したＤＶＤを見てはっきりした。行かなくてよかったと思ったから。「変化」が受け入れられないんだ。ハジメさんたちみたいに年月を共有していないから。

十一月上旬、山形市内の友人三人が庄

内に遊びに来てくれて、隣町にある鳥海山麓の山荘で温泉と食事と静かな夜を楽しんだ。お風呂から部屋に戻るとき、廊下の先に浴衣姿のハジメさんがいた。お互いびっくりした。後から聞いたら、「青年団活動三十周年ＯＢ会」だって。

宴会場には、モモちゃんもチエコちゃんもいたんだって。

Photo：Suzuki Kyoko

雨の中、赤カブ収穫していたら、二重の虹が出たよ

農家さんが玄米を１トンパックに詰めてもってくる。品質を検査し、重量をはかって入庫する

秋のすんごい味覚。近くの清流でトオルさんが採ってきてくれる。ドロドロにすりつぶして、みそ汁になる

# 対詠　ごきげんいかが？　PART44

ＯＮＭ　丸山　弘子
布宮　慈子
小野澤繁雄

祭りきて母のきやうだい揃ひたり九十頭に六人写る　9月16日　N

クレームの減りたるをいう関根さん震災後にはあることとして　9月20日　O

吾亦紅、小菊にすすき色どりの地味なれど彼岸の墓前に供ふ　9月24日　M

漬物のアクセントとせむ紫蘇の実をしごき取りたり丘の畑に　9月28日　N

草々の伸びたる間に茄子の実の折々みえて九月も終る　9月30日　O

色濃きは雄のアキアカネ台風の去りて無音の庭に来てゐる　10月5日　M

安達家の墓所近く咲く彼岸花のどけし舞鶴山の中腹　10月7日　N

隙間なき砂洲のみどりの只中に赤い色あり彼岸の花か　10月7日　O

うれひゐし彼岸花かも赤き見ゆ伸び放題の雑草のなか　10月11日　M

新聞「ふぇみん」に知り合ひたる八十代河内愛子のことばの確かさ　10月17日　N

新築の家のなかにし音のしてボール遊びの類と思いぬ　10月24日　O

「かはいい」と言はるるを嫌ふ幼なゐて不機嫌のまま立ち去りゆけり　10月29日　M

ベクレてるかもしれぬゆゑ見つけたる可愛い栗を山に拾はず　11月8日　N

雨の日の国道の上を若者ら身じまい確か自転車にゆく　11月17日　O

清掃車のこぼしし何を啄むやセグロセキレイ ジィーと鳴きつつ　11月26日　M

雪の舞ふ白きせかいに黒ふたつ風を受けつつ飛んでゐるなり　12月1日　N

お茶の実の光沢のある三粒組み窓辺に置かる置く人のいて　12月10日　O

生ごみを土にかへすと穴を掘るつぼみ多（さは）なる椿の下に　12月15日　M

生きてあればけふ還暦となるはずの兄かくれゐて白百合かをる　12月18日　N

## 前号作品短評A〈小野澤〉

●リストラをされたるのちを隣り家の息子は外廻りの掃除はじめぬ　丸山弘子

大量リストラも業界の動向に含まれないとニュースにもならない、そんな時代性がある。その事情と、一定の時間が経過したはずの、そのあとで、隣家の息子さんの姿が目に見えるものになった。隣人との関係を歌にするのは少し難しいところ。

歌はまた、わが歯科医院、二十階の和風レストランに友とわれ、窓下、本堂の裏、百日紅と近いところで歌われた歌に続いたもの。

後半四首は、大物の家電四種を買い替えた（すごいな）友人の歌、とくに配達員の歌で、昔の記憶だが、重いものをやすやすと運ぶ配達員には驚かされた。

電子レンジはアルバイトが持つ冷蔵庫を背負ふ配達員のうしろに従きて

●夢に色点ずるごとき鳥声の何鳥なりしかふたたび聞かず　結城　文

一連タイトルは「わがノスタルジー」。次の歌にも惹かれた。

父をもつと知りたかりしと思ふ日のまためぐりきぬ祥月命日

鳥声は、絵として記憶される夢に彩りとしてくわえられる。何鳥と云っているが、確かな存在感が残るような。

次の歌で「思ふ日」という。そう思う日も、限定的に「祥月命日」なのだ。その次の歌は、「風化する」で始まる。

一括りに「心ふるふ（景）」という。新しい景を求める旅だちの歌で、それも夏空の下、一連は閉じられた。

心ふるふ景に遇はむとこの夏を子らと旅だつみづあさぎの空

●初めての山に登りぬ富神山（とかみやま）四〇二メートルさんかくの山　布宮慈子

一連タイトルは「富神山」。大体が、その富神山に登頂し、下山するまでの歌といえる一連、その冒頭の歌。四〇二メートル、と（そう高くもないが、）高さを引いて、さんかくの山、とかたちも単純に、ある意味こどもっぽいいいかたで収めたところが新鮮。

写生の歌が、たぶん歩行の順に続く。歌には固有名が多く出て、それが石段を踏んでいるような具体感をもたらす。猫の匂いがするという部屋が着地点になった。

県民の森をめざして上がりゆく富神山麓狐越（きつねごえ）街道

猫の匂ひ残りゐる部屋へ戻り来ぬ山の昔の物語より

## 前号作品短評B〈慈子〉

●去年まで庇にありし燕の巣はひとの都合にて取り払われぬ　池田桂一

幸福の使者といわれる燕。その燕の巣がどうして取り払われてしまったのか。四首目の「無言の人ら」や五首目の「沈黙の人ら」から、作者のもつ感覚と他人の感覚がズレてきていることがわかる。

金にならぬ命は無用と切り捨てし病院をあとに足重く去る

逆らうこともできない患者の気持ちになって、作者は静かな怒りとともに歌に仕上げている。最後の「炒豆を手に盛り呉れし記憶」は、皮膚感覚をともなった一首。

●サングラス反原発の群れの中　岩田都女

いまどきの句である。金曜夜の官邸前デモをはじめ、大江健三郎さんたちが表に立った反原発の集会は、後年どう位置づけられるのか。俳句としてどうか、というよりも、時代を詠んだイキのよさがすべて。

土用太郎パスモ戻つてきたりけり

「土用太郎」は、土用入の日のこと。いかにも俳句的な土用太郎とパスモの取り合わせの妙。蛇足だが、二日目を土用次郎、三日目を土用三郎というそうだ。

●市場では色を揃える要ありて青のリンドウ遅れが云わる　小野澤繁雄

市場に出す花だとしても、生物だから色の着き方が早いものと遅いものが当然でてくる。それを色を揃えるという、ひとの都合によってリンドウの出荷が遅れていることを少しの皮肉を込めて一首にした。

吠えるとき吠えぬときあり犬にしもう憂き日はありやよき日はありや

土手を上り土手を下る坂を上り坂を下るこの歩み今日のもの

この二首も掲出歌と同じように理屈の歌だ。しかも、同じ語や対義語を重ねて使っている。好き嫌いはあるだろうが、試みとして、見た目もおもしろい歌である。

●天空より光射しきて玻璃ごとき若葉透かしてわれに留まる　河村郁子

庭仕事をとおして、不思議な光の情景と出合った作者。地味な仕事ではあるが、土に触れ合うことは生きることの本質を教えてくれているようだ。木の剪定も雑草引きも、作者にとっては喜びであり、いっそう生き生きとしている。

「剪定は自然の掟に従え」のヘッセの言葉くりかえし切る

庭仕事の楽しさが伝わってくる、気持ちのいい一連である。

エッセイ教室「清紫会」の作品より

# 上諏訪

小野澤　繁雄

夏の作業の間をぬって、上諏訪にいってきた。

八月第一週を含む十日間程度を休館して、例年、休館しないとできない作業をしている。間に挟まれた土曜が休みだったので、久しぶり参加することにした。短歌結社の夏の全国集会だが、昨年は大阪だった。

池袋のみどりの窓口の込みようがひどかったので、使いなれないが自販機にした。

小淵沢で相席の女性が下車し、スイカ、ドコモがエリア外とホームにあったのが目に留まった。

上諏訪は、湖側駅前のソバやに入ったら、店の者の地元の者らしい客とのはなしで、風が強いのが（昨日と違う）、というようなことが耳に入った。店では、ソバのほかラーメンも冷麦も出す。

折り畳み傘を日傘代わりにしていたが、湖畔に出てからは、さしていられないほどの風だ。木蔭ではその風のおかげで涼しい。駅で、会のお手伝い先陣と出会ってしまったが、一人歩くことにしたのだ。

遊覧船「スワン」に乗った。岸に交互運航の遊覧船「竜宮丸」がいて、横腹に諏訪市とある。市営なんだな。

湖上に出る。子供づれが多いか。船内アナウンスは声が割れて聞きづらい。三十七本（？）の川が流れ込み、出てゆくのは天竜川のみ、そんなことが耳に残った。

数日、見事な夏雲に感心していたところ、ここでは、その夏雲が山から出て山に沈む。湖上ではさえぎるものがなく、暑いので、デッキに出ているのは女子の集団のみである。

途中の初島が、十五日の花火大会で打上げに使われるという。平坦なデッキ状のスペースだ。九月に、新作の花火のみが打ち上げられるイベントがあると、これは同僚の話。

スワンも竜宮丸の亀も、睫毛の一本一本が、太いワイヤだった。

湖畔の一部では、音楽の夕べ、その準備の若者らがいそがしそうにしている。暑い。

カリンの木が続いていて、実は黄色い袋を被っている。みな若木で、葉の緑と袋の黄色が何だかよい感じをつくっていた。園児らのような、か。

高校時代をすごしたかった町として、信州では諏訪と上田を挙げたところ、上諏訪出身で、女子高時代を上諏訪ですごしたという、件の同僚はよろこんでくれたが、そこにずっと住むことはなかったということでもある。

湖畔沿いの宿では会の受付中で、時間まちの間、支配人に聞いたところ、オーナーはガソリンスタンドということで、系列店にホテルはないという。宿の名がチェーン店のようだったのだ。

散歩でもそうだが、歩きだしの感じが大事だった。

# 人・人・人の中で

大石久美

八月十五日の朝は曇り空。まだ陽の出ぬうちに、十一階のわが家の庭の草花に水を遣る。川向うの大きなホテルは一晩中、耿耿と全館を灯していたのであろう。光の満艦飾である。ぎっしりと居並ぶビルもマンション群もそれなりに灯を残している。

あの日、六十七年前の東京の朝は、一燈だに灯っていた筈がない。戦争が終わるなどとは一般市民には思いも寄らなかったからである。

数時間後、品川の海軍経理学校の兵舎の中に並ばされていた。玉音放送という天皇の御声を聴く為である。ラジオは雑音が多く、あまりはっきり聞えなかったが、「耐え難きを耐え、忍び難きを忍ぶ」のお言葉だけが、はっきりと耳に残ったのは、前に居並ぶ士官、下士官の列の中から啜り泣きの声が聞えてきたからである。

私はいま、靖国神社の参道の群れの中にいる。ここには、若くして画家としての生命(いのち)を終えた大好きな叔父、よく一緒に遊んだ従兄弟の一郎さん、それに、私に遺書を残して特攻隊に殉じた彼（？）が合祀されているからである。

私はこの人（彼）と話した事はない。覚えているのは、教官室の隅で事務をとっている私を硝子戸の外から凝視していた彼の眼、丸い顔だけであろうか、それも二週間足らずのその後、姿は見当らなくなっていた。遠い事であまり覚えていないが、昭和二十年の春の終わりごろ、戦友という人が私の職場に、特攻隊で死んだという彼の遺書を届けにきたのである。この遺書の最後、「私が戦死したら靖国に会いに来て欲しい」が気になり出したのは、戦後、十年も経ってからの事である。

それから、雨の日も風の日も、八月十五日には、私は靖国神社に通う事にしている。

いつもこの日の参拝者は多いが、今日も行列は係員によって区切られ、もう十分近く動かない。私の右隣りは私よりいくらか若い女の人、左は殆ど白髪の男性だが、前の二列が二十七、八の逞しい男達で、多分、右翼系暴力団のような雰囲気を持っているので、なるべく眼を合わせないようにしている。

突然、大粒の雨が降ってきた。右隣りの女の人が傘を差し掛けてくれたのが縁で、この女の人とも左隣りの男の人とも話し出した。それぞれ兄さんが戦死されたのだそうな。毎年、ここへお参りに来ているという。丁度その時、列が動き出し、最前列に私達は押し出されたので、この人達とはそこで別れた。多分これからも会う事は無いだろう。

いっぱいの人をかき分けながら、運よくタクシーを拾えて、日本青年館に向う。

「8月15日を語る歌人のつどい」の出演者も、終戦時幼児であった人、戦後生まれ、等々、少々迫力に欠ける向きがあったが、その中で、映画評論家のあげた、戦時を題材にした映

画や、秋山佐和子氏の「柳原白蓮」に心を打たれた。

白蓮の一子香織の戦死に寄せて

たった四日生きて居たらば死なざりし命と思ふ四日が切なき（白蓮）

# ハナコさん

丸山弘子

同窓会の会報が届いた。

毎年届くが、同窓会のたぐいは好きではないので、いつもはザッと目を通すと、新聞雑誌と一緒に処分してしまう。

しかし、ことしはオヤッと思った。全頁ではないが多色刷りになっている。白黒とはちょっと趣がちがう。巻頭の会長の挨拶の顔写真に目がいった。一年先輩の人だ。何十年も時がすぎ、やや太られ老いてはいるが、昔のやさしい面差しは変らない。白黒にはないカラーの効果かな、と懐かしい気持になった。

学校のことがよみがえってきた。

この学校は商業高校で、渋谷区にある。私の場合、学区外なのだが商業はその規制がなく、どこからでも受験することができた。

私としては、学区内の普通高校を希望していた。しかし、父の許可がおりず、不本意ではあるが、この学校に入学することになった。

父は機械屋だった。仕事は出来た人だと思う。しかし、戦前はともかく、戦後は苦労が多かった。子供を商業高校に入学させる、という父には言い分があった。

「おれは機械屋で、自分の仕事は自信もあるし、満足している。ただ駄目なところもある。そろばん勘定が苦手なんだ。だから、子供は商業に進んでもらうときめていた」

本人はいいが、子供は大変迷惑である。母を味方にしたかったが、

「言うとおりにしておきなさい」

これでは勝目がなかった。

入学式が終り、各クラスに分れ、それぞれ教室がきまった。クラス担任は数学の教師で、自己紹介をすますとすぐ、出席をとりはじめた。ちょっと吃(ども)りながら、次々に生徒の名と顔をたしかめる、むずかしい名前の人もいて、思ったより時間がかかった。

「呼ばれなかった人はいませんか。名簿には一人残っているのですが」

と、先生。

「今日は欠席なのかな。それにしても、この人の名前、何と読むのだろう。コ・タ・ニ・ノ・イ・モ・コさん、でいいのかなあ」

誰も名のり出なかったし、先生の言葉に皆は大笑いになり、それまでの緊張が一気にほぐれ、気持が楽になった。

しばらくして、教室のうしろの戸が開き、女性が一人入ってきた。丁寧に礼をすると、

「遅くなってしまい申訳ございません。コヤノハナコでございます」

あの人だ、と皆は大笑い。本人だけは知らないことで、キョトンとしていた。

ちなみに、先生がコタニノと読んだのは、小さい谷の野と書いてコヤノ。イモコの方は中華の華で、ハナコさんだった。

しかし、華子をイモコと読むのは考えにくい。ただ、当時の出席簿は手書きだったと思うので、こんなことも「アリ」だったのだ、と懐かしい。

## 「清紫会」だより

◆第98回　平成二十四年八月十六日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉大石久美・人・人・人の中で／小野澤繁雄・上諏訪／林博子・ディーゼル車に乗って／丸山弘子・ハナコさん

◆第99回　九月二十日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉池田桂一・一つの記憶／河村郁子・国際ペン大会I／林博子・この頃の子供／松井淑子・戦闘機乗り

◆第100回　十月十八日（木）、会場・文京シビックセンター三階和会議室
〈提出作品〉大石久美・芳枝さん／小野澤繁雄・胡瓜／河村郁子・国際ペン大会II／林博子・養生訓／松井淑子・時間／丸山弘子・もってえねえ

（松井）

# 無二の会短信

◆締め切り日が近付いても、作品が揃わない。しきりに言葉を書き留めるのだが、どうしても思いがつながらない。一首にならないのである。苦し紛れに、講談社発行の『カラー版日本語大辞典』（梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明　監修）を手にして「この辞典の使い方」のページに目を通していたら、協力者一覧なる「編纂、執筆、校訂」のタイトルの中に、安達裕之君の名前があったので驚いた。

　萩原朔太郎に傾倒していた彼は、結婚して子供が生まれると、その名前まで付けてしまうほどで、「展景」では三十五篇の詩を発表している。創刊号からは会計を担当し、24号まで作品はなかったが、25号から39号までは、案の定「月」に関わる内容の詩作が含まれる。お酒好きな彼が一度だけ誘いの電話を掛けてきたのだが、生憎仕事の都合で断ったことがあった。今年の十月で三回忌である。今となっては、こちらから誘う術もない。

池田桂一

◆抱っこ紐。この頃の赤ちゃんは幸せだ。抱っこ紐の上でママのお顔を見ていられる。ママの目に目を合わせ「オックン、オックン」と話しかける。ママの胸に身を預け、二人だけの夢を楽しむ。一昔前の幼子はお母さんの背中にいて、母親の顔は見えなかった。しかし、母さんの背の高さから知らない社会を眺める事ができた。ねんねこ袢纏の暖かさも知っている。

岩田トメ

◆久しぶりに南瓜を煮た。このところ、果物売り場で柿によく手を出す。種無しもあるが、種ありより少し柔らかいようだ。ボクはかたい柿が好きだ。それにしても、おなかがすぐくちくなるので、柿も一度には半分しか食べない。南瓜も四分の一を買うが、それでも多すぎる。三回くらい温めることになる。

小野澤繁雄

◆今年は「味覚」で秋を迎えた。九月の半ばに、長野から、知人の丹精の巨峰が送られてきた。「今どきは、種なしがはやりますが、家用なので種があります。気をつけて食べて下さい」と、添え書きがあった、本来は種があるべきなのに、大変な気遣いをして下さったと、考えさせられた。

　もう一つは、カナダからの松茸である。降り積もった、厚い松葉を押し上げて出てくるのだから大きいことは知っていた。傘は開いて直径十五センチ以上にもなる。「箱に入っているのを見た時は窄んでいたのよ。良かったら食べてみて」。私は、松茸なら傘が開いていようがなかろうが、大好物である。焼いたり、炊いたり、吸い物にしたり、ソテーにしたり、茶碗蒸しに、炊きこみご飯にと、楽しんだ。当分、松茸はご遠慮したいくらいだ。勿論、「傘が開いてしまっていますが」と断って、四分の一片をお裾分けした。添え言葉はエティケットでもあると気付いた。河村郁子

◆秋に郷里の天童で中学時代の同級生による「芋煮会」がここ数年続けて行われている。五十路を過ぎると娘、息子に相手にしてもらえず、若干寂しくなる年代になり、また仕事も先が見えて、お里帰り現象が加速しているようだ。この日のために日帰りで東京を往復する強者もいる。かっこつけても仕方ない同級生と同じような話を何度もして、楽しんでいる年になってきた。

新関伸也

◆桜と違ってあまり話題にならないが、今年は金木犀の咲くのがおそい。私の日記によれば、去年、咲いているのに気付いたのは十月二日となっているが、今年は十月十五日である。香りも、去年と比べてはるかに弱いようだ。夏の暑さが長引いたせいだろうか。　松井淑子

◆二年ほど前、弟の友達が亡くなった。ラーメン屋だった。息子は父親の仕事を継ぐ気がないらしく、空き店舗のままだった。やっと借り手がついて開店になった。店の名前は「青雲」。あら線香の名と同じだ、とおかしかったが、若い人は気にもかけないらしい。一度行ってみようと思っている。　丸山弘子

◆日本では、安達裕之くんの三回忌、従兄の布宮徹兄ちゃんの一周忌が終わったそうだ。モンゴルの秋は一瞬で終わる。せつない季節を振り返ることなく、厳しい冬へと立ち向かう強さを求められているかのようだ。モンゴルでの二度目の冬は、すぐそこの曲がり角まで来ている。　山内ゆう子

◆秋は何となく気忙しい。日が短くなるせいか、夏の終わり頃から庭の木々に少しずつ落葉するものがでてくるせいか――そのくせ草は生えることをやめない。穴居生活で厳しい冬を耐えた古代人の遺伝子が、わが体内にもひそんでいるのか、何とはなしに気忙しい。　結城　文

# 編集後記

◆十月のはじめ、スイスに住む友人が山形を訪ねてくれた。彼女は大震災後の日本をとても心配していて、帰国したこの機会に日本という国を自分の目で確かめたいということだった。山形に来る前に、首相官邸前の金曜日のデモに参加して様子を見てきたらしい。驚いたのは、スイスでインターネットを通して見ているらしく、当方で把握している情報をほとんど知っていることだった。彼女は聞き上手である。お互いにどんな話をしても、どんどん広がりをもって展開していくのは心地よいものであった。十年に一度くらいしか会わないのに、とても深い話ができたのではないだろうか。彼女は外国人にこう説明しているという。日本人のよさと日本のシステムの問題点は別だ、と。スイスの政治家、特に女性の政治家はほんとうに優秀で、何をきかれても即答できるそうだ。外国人と結婚して外国に住む日本人は、きっと彼女のように日本という国を背負って生きているのだろう。むかし一緒に仕事をした懐かしさ半分、現在のこちらの姿勢をただされる思い半分の再会だった。

◆田口ランディの本『サンカーラ　この世の断片をたぐり寄せて』（二〇一二年十月二十日刊、新潮社）を読んだ。田口ランディの語るものは、いつもヒリヒリする感覚を残す。観念ではない、心に直接訴えてくることばだから。ある時期全部読んで、彼女の出るトークショー（？）に行ってから、なぜか気持ちが離れた。彼女の信奉者がたくさんいて、その雰囲気になじめなかったのかもしれない。しかし、今回の本は、やはりすごい。ずっと自分で考えることをやめなかったんだ、と思った。

それで、思い出したことがある。高木仁三郎さんのことだ。わたしは一九九八年十二月から翌年にかけて、原子力資料情報室の主催する、高木学校Bコース「科学物質と生活」という講座に行っていた。ダイオキシン、フロンなどが問題になっていたころだと思う。第一回「プルトニウムと市民」を受講した折には、こんな歌を作っている。

大手術経たる体と聞きをれど意志ますぐなる高木仁三郎氏
ナノグラム、ピコグラムとふ小ささを思ひ石ころ蹴りて帰宅す

高木さんは、いつもにこやかに話す人だった。がんの手術のあとは体力も落ちていたはずだが、自分の知識を素人にもわかりやすく伝えようとしてくれた。その肝の据わりかたというか、穏やかさは、いま考えるとただ者ではなかった。このごろしきりに高木さんの美しい目を思い出す。

◆来年の手帳を求めるのは幸せな気分だ。ほとんどのスケジュールを携帯電話に入力しているとしても、やはり気に入った手帳を買う。世の中はたいへんな状況が続くわけだが、来年こそ、なんとか少しでも明るい年にならないかと願いながら、新しい手帳を手にするのである。

（布宮慈子）

季刊 展景 68号

二〇一二年十二月二十二日発行

編集・発行人　布宮慈子

オンライン版制作　堀　哲郎

無二の会・展景発行所
山形市上町二―一―七―二〇二
muninokai.com

Copyright©2012 MUNINOKAI. All rights reserved.